

妙法蓮華經如来寿量品第十六

本門・正宗分・正開近顯遠・広開近顯遠斷疑生信・誠信・三誠
爾の時に仏、諸の菩薩、及び一切の大衆に告げたまわく、

諸の善男子、汝等当に如来の誠諦の語を信解すべし。

復大衆に告げたまわく、

汝等当に、如来の誠諦の語を信解すべし。

又復、諸の大衆に告げたまわく、

汝等当に、如来の誠諦の語を信解すべし。

是の時に菩薩大衆、弥勒を首と為して、合掌して仏に白して

言さく、

世尊、唯願わくは之を説きたまえ。我等当に、仏の語を信

受^{じゆ}したてまつるべし。

是^{かく}の如^{ごと}く三^みたび白^{もう}し已^{おほ}つて、復^{また}言^{もう}さく、

唯^{ただ}願^{ねが}わくは之^{これ}を説^ときたまえ、我^{われ}等^ら当^{まさ}に、仏^{ほとけ}の語^{みこと}を信^{しん}受^{じゆ}した

てまつるべしと。

爾^その時^{とき}に世^せ尊^{そん}、諸^{もろ}の菩^ぼ薩^{さつ}の、三^みたび請^{しやう}じて止^やまざることを

知^しめして、之^{これ}に告^つげて言^{のたま}わく、

汝^{なん}等^{だち}諦^{あきら}かに聴^きけ、如^に来^{らい}の秘^ひ密^{みつ}神^{じん}通^{ずう}の力^{ちから}を。

一切^{いっさい}世^{せい}間^{けん}の天^{てん}人^{にん}、及^{およ}び阿^あ修^{しゆ}羅^らは皆^{みな}今^{いま}の釈^{しや}迦^か牟^む尼^に仏^{ぶつ}、釈^{しや}氏^しの宮^{みや}

を出^いでて、伽^が耶^や城^{じやう}を去^さること遠^{とほ}からず、道^{どう}場^{じやう}に坐^ざして、阿^あ耨^{のく}鞞^{にき}

多^た羅^ら三^{さん}藐^{みやく}三^{さん}菩^ぼ提^{だい}を得^えたまえりと謂^{おも}えり。然^{しか}るに善^{ぜん}男^{なん}子^し、我^{われ}

實^{じつ}に成^{じやう}仏^{ぶつ}してより已^{この}来^{かた}、無^む量^{りやう}無^む辺^{へん}百^{ひやく}千^{せん}万^{まん}億^{いふ}那^な由^う佉^こ阿^あ僧^{そう}祇^ぎの三^{さん}千^{せん}大^{だい}千^{せん}世^{せい}界^{かい}を、仮^た使^い人^{ひと}

譬^{たと}えば、五^ご百^{ひやく}千^{せん}万^{まん}億^{いふ}那^な由^う佉^こ阿^あ僧^{そう}祇^ぎの三^{さん}千^{せん}大^{だい}千^{せん}世^{せい}界^{かい}を、仮^た使^い人^{ひと}

有^あつて、抹^{まつ}して微^み塵^{じん}と爲^なして、東方^{とうほう}五百^{ごひやく}千万^{せんまん}億^{おく}那^な由^ゆ佉^た阿^あ僧^{そう}祇^ぎ

の国^{くに}を過^すぎて、乃^{すなわ}ち一^{いち}塵^{じん}を下^{くだ}し、是^{かく}の如^{ごと}く東^{ひがし}に行^ゆきて是^この微^み

塵^{じん}を尽^{つく}さん^{ごと}が如^{ごと}き、諸^{もろもろ}の善^{ぜん}男^{なん}子^し、意^{こころ}に於^おいて云^い何^{かん}。是^この諸^{もろもろ}の

世^せ界^{かい}は、思^し惟^{ゆい}し校^{きやう}計^{けい}して、其^その數^{かず}を知^しることを得^うべしや不^{いな}や。

答^{こたへ}不^ふ知^ち 彌^み勒^{ろく}菩^ぼ薩^{さつ}等^{とう}、俱^{とも}に仏^{ほとけ}に白^{もう}して言^{いう}さく、

世^せ尊^{そん}、是^この諸^{もろもろ}の世^せ界^{かい}は、無^む量^{りやう}無^む辺^{へん}にして、算^{さん}數^{じゆ}の知^しる所^{ところ}に

非^{あら}ず。亦^{また}心^{しん}力^{りき}の及^{およ}ぶ所^{ところ}に非^{あら}ず。一^{いつ}切^{さい}の聲^{しょう}聞^{もん}、辟^{びやく}支^し仏^{ぶつ}、無^む漏^{ろう}

智^ちを以^もつても、思^し惟^{ゆい}して其^その限^{げん}數^{じゆ}を知^しること能^{あた}わじ。我^{われ}等^ら

阿^あ惟^{ゆい}越^{いつ}致^ち地^ぢに住^{じゆう}すれども、是^この事^じの中^{なか}に於^おいては、亦^{また}達^{たつ}せ

ざる所^{ところ}なり。世^せ尊^{そん}、是^{かく}の如^{ごと}き諸^{もろもろ}の世^せ界^{かい}無^む量^{りやう}無^む辺^{へん}なり。

合^あ顯^{けん}遠^{えん} 爾^その時^{とき}に仏^{ほとけ}、大^{だい}菩^ぼ薩^{さつ}衆^{しゆ}に告^つげたまわく、

諸^{もろもろ}の善^{ぜん}男^{なん}子^し、今^{いま}当^{まさ}に分^{ぶん}明^{みやう}に、汝^{なんだち}等^{せんご}に宣^{せん}語^ごすべし。是^この諸^{もろもろ}の世^せ

界かいの、若もしは微塵みじんを著おき、及および著おかざる者ものを尽ことごとく以もつて塵ちりと

為なして、一塵いちじんを一劫いつこうとせん。我われ成じやうぶつ仏ぶつしてより已このかた来またこれ、復また此これに過す

ぎたること百千万億那由佗阿僧祇劫ひやくせんまんのくなゆたあそうぎこうなり。是これより来このかたわれつね、我常こ

に此この娑婆世界しやばせかいに在あつて説法教化せつぽうきやうけす。亦また、余処よしよの百千万億那

由佗阿僧祇ゆたあそうぎの国くにに於おいても、衆生しゆじやうを導利どうりす。諸もろもろの善男子ぜんなんし、是こ

の中間ちゆうげんに於おいて、我然燈仏等われねんどうぶつどうと説とき、又復またまた、其涅槃それねはんに入いると

言いいき。是かくの如ごときは皆方便みなほうべんを以もつて分別ふんべつせしなり。諸もろもろの善ぜん

男子なんし、若もし衆生しゆじやう有あつて我わが所もとに來至らいしするには我われ仏眼ぶつげんを以もつ

て、其その信等しんどうの諸根しよこんの利鈍りどんを觀かんじて、応まさに度どすべき所ところに随したがつ

て、処処しよしよに自みづから名字なみょうじの不同ふどう、年紀ねんきの大小だいしやうを説とき、亦復またまた、現げんじ

て当まさに涅槃ねはんに入いるべしと言いい、又また、種種しゆじゆの方便ほうべんを以もつて、微み

妙みやうの法ほうを説といて、能よく衆生しゆじやうをして歡喜かんぎの心こころを發おこさしめき。

現在益物・明機感

諸の善男子、如来諸の衆生の、小法を楽しめる徳薄垢重の者

を見ては、是の人の為に、我少くして出家し、阿耨多羅三

藐三菩提を得たりと説く。然るに我、実に成仏してより已

来、久遠なること斯の若し。但方便を以って、衆生を教化し

て仏道に入らしめんとして、是の如き説を作す。諸の善男

子、如来の演ぶる所の經典は、皆衆生を度脱せんが為なり。

或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は

他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言説

する所は、皆実にして虚しからず。所以は何ん。如来は如

実に、三界の相を知見す。生死の、若しは退、若しは出有

ること無く、亦在世、及び滅度の者無し。実に非ず、虚に非

ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず。

第四句

第五句

第二句

第三句

斯の如きの事、如来明かに見て、錯謬有ること無し。諸の

虚・機感

衆生、種種の性、種種の欲、種種の行、種種の憶想分別有

施化

るを以つての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干

の因縁、譬喩、言辞を以つて、種種に法を説く。所作の仏事

非滅現滅・明非滅現滅・明本実不滅・明果常

未だ曾て暫くも廃せず。是の如く、我成仏してより已来、

甚だ大いに久遠なり。寿命無量阿僧祇劫なり。常住にして

挙因況

滅せず。諸の善男子、我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所

明迹中唱滅

の寿命、今猶未だ尽きず。復上の数に倍せり。然るに今、

実の滅度に非ざれども、而も便ち、唱えて当に滅度を取る

明現滅利益・不滅有損・不滅有損

べしと言う。如来、是の方便を以つて、衆生を教化す。所

以は何ん。若し仏、久しく世に住せば、薄徳の人は善根を

種えず、貧窮下賤にして、五欲に貪著し、憶想妄見の網の中

に入りなん。若し如来、常に在って滅せずと見ば、便ち憍恣

を起して厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能わ

じ。是の故に如来、方便を以って説く。比丘当に知るべし。

諸仏の出世には、値遇すべきこと難し。所以は何ん。諸の薄

徳の人は、無量百千万億劫を過ぎて、或は仏を見る有り、或

は見ざる者あり。此の事を以っての故に、我是の言を作す。

諸の比丘、如来は見ることでべきこと難しと。

斯の衆生等、是の如き語を聞いては、必ず当に難遭の想を

生じ、心に恋慕を懷き、仏を渴仰して、便ち善根を種ゆべ

し。是の故に如来、実に滅せずと雖も、而も滅度すと言う。

又善男子、諸仏如来は、法皆是の如し、衆生を度せんが為

なれば、皆実にして、虚しからず。

譬説・開譬・良医治子譬・医遠行譬過去・応化・超譬・超化

譬えば、良医の智慧聡達にして、明かに方薬に練し、善く

衆病を治す。其の人、諸の子息多し。若しは十、二十、乃至

現滅

百数なり。事の縁有るを以って、遠く余国に至りぬ。諸子

復去譬現在・譬機感

後に他の毒薬を飲む。薬発し、悶乱して地に宛転す。是の

非生現生・形声益・形益

時に其の父、還り来って家に帰りぬ。諸の子毒を飲む

で、或は本心を失える、或は失わざる者あり。遙かに其の

父を見て、皆大いに歓喜し、拝跪して問訊すらく、

善く安穩に帰りましたまえり。我等愚癡にして、誤って毒薬を

服せり。願わくは救療せられて、更に寿命を賜えと。

声益・受請説法輪

父、子等の苦悩すること是の如くなるを見て、諸の経方に

依って、好き薬草の色香美味、皆悉く具足せるを求めて、擣

譬勸誠・勸門

篋和合して、子に与えて服せしむ。而して是の言を作さく、

此の大良薬は、色香美味、皆悉く具足せり。汝等服す

べし。速かに苦悩を除いて、復衆の患無けんと。

其の諸の子の中に、心を失わざる者は、此の良薬の色香、俱

に好きを見て、即便ち之を服するに、病尽く除こり愈えぬ。

余の心を失える者は、其の父の来れるを見て、亦歡喜し、

問訊して病を治せんことを求索むと雖も、然も其の薬を与

うるに、而も肯て服せず。所以は何ん。毒氣深く入って、

本心を失えるが故に、此の好き色香ある薬に於いて、美か

らずと謂えり。父是の念を作さく、

此の子慰むべし。毒に中られて心皆顛倒せり。我を見て喜

んで救療を求索むと雖も、是の如き好き薬を、而も肯えて

服せず。我今当に方便を設けて、此の薬を服せしむべし。

唱応死すなわ 即ち是の言を作さく、

汝等当に知るべし。我今衰老して、死の時已に至りぬ。

是の好き良薬を、今留めて此に在く、汝取って服すべし。

差えじと憂うることを勿れと。

是の教を作し已って、復他国に至り、使を遣して還って告ぐ

汝が父已に死しぬと。

是の時に諸の子、父背喪せりと聞いて心大いに憂悩して

是の念を作さく、

若し父在しなば、我等を慈愍して、能く救護せられまし。

今者、我を捨てて遠く他国に喪したまいぬ。自ら未来機感 惟る

に孤露にして復恃怙無し。

常に悲感を懷いて、心遂に醒悟しぬ。乃ち此の薬の色香味

美なるを知つて、即ち取つて之を服するに、毒の病皆愈ゆ。

未来応化

其の父、子悉く已に差ゆることを得つと聞いて、尋いで

便ち来り帰つて、咸く之に見えしめんが如し。

治子不虛

諸の善男子、意に於いて云何。頗し人の、能く此の良医

の虚妄の罪を説く有らんや不や。

不なり、世尊。

合譬・合過去益物

仏の言わく、

我も亦是の如し、成仏してより已来、無量無辺百千万億那

由佗阿僧祇劫なり。衆生の為の故に、方便力を以つて当に

滅度すべしと言う。亦能く法の如く、我が虚妄の過を説く

者有ること無けん。

偈頌

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて

言わく、
のたま

頌法説・頌三世益物・頌過去・成道已久
われほとけえ
このかたへ
我仏を得てより来、経たる所の諸の劫数

むりようひやくせんまん
無量百千万
億載阿僧祇なり

中間利益
つねほうと
常に法を説いて
無数億の衆生を教化して

ぶつどう
仏道に入らしむ
爾しより来無量劫なり

住処
しゅじようど
衆生を度せんが為の故に
方便して涅槃を現ず

しか
而も実には滅度せず
常に此に住して法を説く

われつね
我常に此に住すれども
諸の神通力を以って

てんどう
顛倒の衆生をして
近しと雖も而も見えざらしむ

頌現在・頌非生現生
しゅわめつども
衆我が滅度を見て
広く舍利を供養し

ことごとみなれんば
咸く皆恋慕を懷いて
渴仰の心を生ず

しゅじようすで
衆生既に信伏し
質直にして意柔軟に

一心に仏を見たてまつらんと欲して 自ら身命を惜しまず

時に我及び衆僧 俱に靈鷲山に出ず

頌非滅現滅

我時に衆生に語る 常に此に在って滅せず

方便力を以っての故に 滅不滅有りと現ず

余国の衆生の 恭敬し信樂する者有らば

我復彼の中に於いて 為に無上の法を説く

汝等此れを聞かずして 但我滅度すと謂えり

我諸の衆生を見るに 苦海に没在せり

故に為に身を現ぜずして 其れをして渴仰を生ぜしむ

其の心の恋慕するに因って 乃ち出でて為に法を説く

頌常住不滅

神通力是の如し 阿僧祇劫に於いて

常に靈鷲山 及び余の諸の住処に在り

衆生劫尽きて 大火に焼かるると見る時も

我が此の土は安穩にして 天人常に充滿せり

園林諸の堂閣 種種の宝をもつて莊嚴し

宝樹華果多くして 衆生の遊樂する所なり

諸天天鼓を撃つて 常に衆の伎樂を作し

曼陀羅華を雨らして 仏及び大衆に散ず

我が淨土は毀れざるに 而も衆は焼け尽きて

憂怖諸の苦惱 是の如き悉く充滿せりと見る

是の諸の罪の衆生は 惡業の因縁を以つて

阿僧祇劫を過ぐれども 三宝の名を聞かず

諸の有ゆる功德を修し 柔和質直なる者は

即ち皆我が身 此に在つて法を説くと見る

或時あるときは此この衆しゆの為ために 仏ぶつ壽じゆ無む量りやうなりと説とく

久ひさしくあつて 乃いまし仏ほとけを見み奉たてまつる者ものは 為ために仏ほとけには値あい難がたしと説とく

我わが智ち力りき是この如ごとし 慧え光こう照てらすこと無む量りやうにして

壽命じゆみ無む数しゆ劫こつなり 久ひさしく業ごうを修しゆして得うる所ところなり

汝なんだち等ち智あ有あらん者もの 此こに於おいて疑うたがい生しやうずること勿なかれ

当まさに断だんじて永ながく尽つきしむべし 仏ぶつ語ごは実じつにして虚むなしからず

医くすしの善よき方ほう便べんをもつて 狂おかし子しを治じせんが為ための故ゆゑに

実じつには在あれども而しかし死しすと言いうに 能よく虚こ妄もうを説とくもの無なきが如ごとく

我われも亦また為これ世よの父ちち 諸もろの苦く患げんを救すくう者ものなり

凡ぼん夫ぶの顛てん倒どうするを為もつて 実じつには在あれども而しかも滅めつすと言いう

常つねに我われを見るを以もつての故ゆゑに 而しかも憍きやう恣しの心こころを生しやうじ

放ほう逸いつにして五ご欲よくに著じやくし 惡あく道どうの中なかに墮おちなん

我^{われ}常^{つね}に衆^{しゆ}生^{じやう}の 道^{どう}を行^ぎじ道^{どう}を行^ぎぜざるを知^しつて

応^{まさ}に度^どすべき所^{ところ}に随^{したが}つて 為^{ため}に種^{しゆ}種^{じゆ}の法^{ほう}を説^とく

毎^{つね}に自^{みづか}ら是^この念^{ねん}を作^なさく 何^{なに}を以^もつてか衆^{しゆ}生^{じやう}をして

無^む上^{じやう}道^{どう}に入^いり 速^{すみ}かに仏^{ぶつ}身^{しん}を成^{じやう}就^{じゆ}することを得^えせしめんと